

# 日本における精神科医療・医学史研究の歩み (その1)——戦前

岡田 靖雄

1997年11月に精神医学史学会（現・日本精神医学史学会）が発足してから、日本における精神科医療・医学史研究は飛躍的にすすんだ。とくに、学会発足当時は少数であった日本に関する研究はおおきく躍進している。といっても、先行研究の評価が充分でない、あるいは文献をただしく引用していない（極端な例では、ある出来事がそれより数年前の文献に予言されている形になる）ような研究もままみられる。そこで、これまでの研究業績を、あたうるかぎり整理して、今後の研究者の役にたてようとおもいいいたった。

さいわい、まえの精神科医療史研究会（青柿舎はそれをうけついだものといえる）では、戦前の主要な一般医学雑誌から精神科に関係する論文・記事の複写をとっていた。そこで、該当書籍のほか、『救治会々報』（←『心疾者の救護』）、『芸備医事』、『国家医学会雑誌』（→『社会医学』）、『神経学雑誌』（→『精神神経学雑誌』）、『中外医事新報』、『東京医学会雑誌』、『東京医事新報』、『日本医事新報』、『脳』（→『精神と科学』）から、日本の精神科医療・医学史に関する研究をひろった。そのさい、直接外国に関するもの、病志（パトグラフィ）に関するものはのぞいた。戦前には、1論文がいくつかの関連誌にほぼ同時に掲載されることもしばしばあったが、ここでは、それらのうち中心的な雑誌にのったものだけひろった。これで、戦前の研究の9割までをひろっているものと自負している。

このあとは、戦後期を2期にわけて報告し、最終的には、できれば、解説つきの文献目録集をつくりたい。

I. 呉秀三先生著作。戦前における最大の研究者は、なんといっても呉先生で、計8点がある。そのうち3点が、おおきく、そして重要なもので

ある。その一つ「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」（1912）は、東京医学会創立廿五年祝賀論文第二輯としてかかれたもので、精神科に関する各個の施設、制度の歴史・現状をまとめたものである。近年、精神病者をあつかった神社・仏閣などの調査がさかんになったが、それもこの論文の記述を出発点とすることがおおい。京都の岩倉についても、ほかの資料にみられない証言がここにのこされている（それはもちろん、著者の照会にこたえたであろう人がしらべたものであろうが）。ただ、この論文には不幸な後史がつきまとう。この論文は刊記をかいた別刷りとしてのこされていて、復刻にはそれが見つかわれた。また、榎田五郎は「日本に於ける精神病学の日乗」に、この刊年を1913年とした。復刻はこの榎田論文と合冊でなされ、解説はこの刊年を1907年とするした（東京医学会創立は1885年で、この1907年にはなんの根拠もない）。また、合冊された両論文の内容を混同している引用さえあらわれる始末である。

もう一つおおきいのは、『神経学雑誌』第15巻から第25巻にかけ80回あまりに連載された「磯辺偶渉」で、精神病に関する古文書を抄録・解説したものである（1916-1925）。これにならぶのが、在職25年祝賀会への謝礼としてだした『呉氏医聖堂叢書』（呉秀三、1923）で、土田獻『癲癇狂經驗篇』、香川修徳『一本堂行余医言』、陶山尚迪『人狐弁惑談』、守部正稽『酒説養生論』など計18篇の癲狂論をおさめている。また、東京大学医学図書館には何冊もの「医聖堂叢書」稿本があり（一部分は順天堂大学にも蔵されているという）、『呉氏医聖堂叢書』の続編も予定されていたことがわかる。

II. つぎは、この呉先生をめぐるもの13点で、

『芸備医事』の「故会長呉秀三氏追悼号」(1932)、『呉秀三小伝』(呉博士伝記編纂会、1933)などがある。『呉秀三小伝』は、復刻がでている今も、原本は2万円をこす古書価をたもっている。座談会「呉秀三先生を偲ぶ夕」(1939)で、同級であった近藤次繁は、教授会で精神科の拡充についてのべた意見に青山胤通学長が耳をかたむけなかったところ、先生がはげしくつめより、学長もあおくなつた、という思い出をかたっている。いくつかの場で呉先生や巢鴨病院の思い出をかいている氏家信は、数年間巢鴨病院の医員であり、戦後には東京医科大学の教授をした人で、歌人でもあった。

Ⅲ. 『呉教授莅職二十五年文集』全4集は、呉教授在職二十五年祝賀会から1925年から1928年にかけて刊行されたもので、歴史に関するものが15編はいつている。そのなかには、東京帝国大学医学部精神病学教室、東京府立松沢病院の歴史および患者統計がはいっている。「日本に於ける精神病学の日乗」をかいた榎田五郎は、「精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」で呉先生の共著者であり、また丹波康頼の後裔でもあった、森林太郎は「狂癲ノ二字」をよせているが、当時の杉田直樹助教授がしるすところでは、「これはおもしろくない」と呉先生がかきなおしてもらったものである(林太郎の弟篤次郎が同級生だったので、呉先生は森林太郎としたしかつた)。

Ⅳ. そのほかのものでは、まず通史あるいはそれにちかいものが20編あつた。そこにはまず、榊俣がドイツで講演した「日本癲狂論」(1881, 原文ドイツ語)がある。「従前の法律と精神病」(1912)をかいた杉江董は、片山國嘉について日本の司法精神病学を建立した人である。榎田は、制度および施設の歴史につき3論文をかいている。精神病学の社会事業的な面をとりあげた齋藤玉男は、東京府立松沢病院副院長および日本医科大学教授をした人である。日本医史学会理事長にもなつた法律家山崎佐は『神経学雑法』第33-34巻(1931-1932)に5回にわたり「精神病患者処遇考」をかいた。これは主として江戸時代における精神

病患者処遇を文書にもとづきしるしているものである(おそらく中断しているが、それは呉先生の死と同時期になっている)。山崎文庫にのこされている文書による研究は今もつづけられている。菅修「本邦ニ於ケル精神病患者並ニ之ニ近接セル精神異常者ニ関スル調査」(1937)は、当時の施設の一覧表や関連統計をおさめていて、戦前の施設をさぐっていくうえでは、これも出発点となる資料である。「京都に於ける精神病患者医療施設の回顧」(1935)をかいた土屋榮吉は、岩倉病院長だった人である。

伝記は7点あつた。東京帝国大学医科大学で精神病学講座を兼担し東京府巢鴨病院医長をつとめた片山については、「片山國嘉追悼録」(社会医学、1931)がある。内村祐之「榊俣先生と東京帝国大学医学部精神病学教室の創設」(1940)は、日本で最初の精神病学教室をひらいた人の、当時へのこされていた日記にもとづく伝記で、第一級資料にちかい価値をもつ(原本の日記を内村はどこへやったのか、その行方はわかつていない)。

憑き物および妖異現象については栗原清一による6点および武田静登による4編など計12点がある。栗原は横浜脳病院につとめていた人だが、この人の著書『古文獻に拠る日本に於ける精神病の特質及標型の樹立』(1933)は1,100ページをこす大著であるが、この大著は今まで注目されることなくきた。

その他とした5点のなかで注目すべきは、湯澤三千男「精神病院法ニ就テ」(1920)である。精神病院法は1919年に成立したが、予算不足のために全文施行までに数年を要した。もつてまわつた言い方をしている同法の施行規則をとりあげた湯澤は、“何のことか御聞きになつてもちよつと分からないでありませう。立法技術者と云ふものは精神病患者に近いやうな感じが起りはせぬかと思ひます”とかたっているが、この湯澤はなんと内務省衛生局保健課長であつた(戦前にはすごい官僚もいたものである)。

(平成25年1月例会)